

## 謹賀新年

謹んで新年のお慶びを申し上げ  
併せてご家族皆様のご多幸をお祈り致します  
平成29年 元旦

阿部敏雄(敏翁)

さてここ数年、年の初めに旧年の年次報告的なやや長文の賀状を纏めていますが、今回も引き続いて近況報告を纏めてみました。

ご笑覧頂ければ幸いです。

小生明けて米寿(数え年)を迎えましたが、身体の方はさておき頭の方は益々回転が止まらなくなって快調だと思っています。

ここ数年来触れていた「酒場放浪とカラオケ」や「珈琲の研究？」などについては後で簡単に触れたいと思いますが、小生にとって旧年中最大のトピックスは一昨年構築した私論「仏説大東亜戦争」の深化の試みでした。

### 1. 「仏説大東亜戦争」の深化

旧年中、注力したと言えるのは是しかありません。

一昨年来の拙論「仏説大東亜戦争」をより深化させる為、引き続き探求したのですが、論議の幅を拡大する為、60冊を超える書籍に目を通しました。

これは、小生の生涯で且つて無い経験で、この意味でも昨年は多分忘れられない年になったのではないかと思います。

そしてその結果、当初全く予想もしていなかった議論の展開を導き出すことが出来たと思っています。



書籍探索活動の初期は解説書的なものを選ぶ事が多かったのですが、それだけでは物足りなはなり、昨年夏以降は原典や学術的著作に及ぶ事が多くなりました。

この異常とも思われる書籍探索活動を記念して、ハイライトと言わなければならない書籍群を撮った写真二葉をご覧に入れます。



上図は、『華嚴經』(江部鴨村による口語全訳)全2巻と、その注釈書『華嚴經探玄記』(華嚴宗第3祖法蔵[643~712年]によるもの)、これは 昭和新纂『国訳大蔵経宗典部』第14.15.16巻(漢文読み下し)に当たります。

下図は、中村元選集(決定版 全32巻 春秋社発行)の内16巻を我が家の書架に並べて撮った写真です。

この他、中村元監修・補註『ジャータカ全集』全10巻、国訳大蔵経(全29巻 第一書房 復刻版)から6巻、校本宮沢賢治全集(筑摩書房 全14巻)から5巻 などなどでした。

また読書中に疑問点があった場合、ウェブによる検索も数十回に及んでいます。

これらの作業と考察により、新しい二つの切り口を見出すことが出来たのですが、ここでは、少し長くなりますが、「仏説大東亜戦争」発想の原点から説き起こす事にしたいと思います。

-----  
(1) 私は、先の大東亜戦争は日本民族が、東亜の解放を願って行った捨身供養だったと思うようになった。どう考えても勝ち目の無い戦争にのめり込んでいった深層心理としては、そう考えるのが最も妥当の様に思えるのである。

私がこう考え出したのにはヒントがあった。

十数年前、北一輝の旧跡を佐渡に訪れた際、彼の生家にほど近い若宮神社にある北一輝と弟・吟吉の彰徳碑の裏にある北一輝への安岡正篤による撰文がそれである。

その大意は、『佐渡はかつてから幾多の革命的人物が流謫されているが、特に順徳上皇と日蓮上人の英魂が先生の心霊に強く力を及ぼした。そして、天皇と法華経により天地震裂し、無量の菩薩や優れた衆生が現れる革命を期して殺身供養したと察することが出来る。』この文は、短い文章の中に北一輝の本質と佐渡との関わりを簡潔に表現仕切っていると思えるものだが、これが上述の私論構築にヒントを与えたのであった。

私はこの構想を温めていたのだったが、一昨年夏戦後七十年の安倍談話などに触発されて多少論理の筋道を立ててみた。

それは日本民族が仏教伝来の当初から捨身供養の考えを受け入れていて、それをある種の憧れをもって表現した「捨身飼虎図」があり、これは日本民族の性情の特筆を表しているとの記述を矢代幸雄著「日本美術の特質」に見出して一先ずの論理を構築出来たのであった。

(2) 今年に入ってから、考察をさらに進め本邦に捨身供養の考えが根付き継続される事に関する重要人物として華嚴宗の明恵上人、と北条泰時に触れ、その思想の原点である「華嚴経」(江部鴨村による口語全訳)を読み直しその中に「捨身」の位置付けを探った。

そして、解説書などでは触れられていない華嚴経第4会「夜摩天宮会」中「金剛幢菩薩十廻向品 第二十一」中の「第六 随順平等善根廻向」が自分の身体や妻子を含むあらゆるものの布施の重要性を説いている事を発見(?)した。(「華嚴経」は「七处八会」で構成されている)

(3) 今夏よりは、「捨身」と密接な関係がある「輪廻転生」思想誕生の原点を紀元前まで遡って、中村元選集(決定版 全32巻 春秋社発行)の中に探ってみた。

さらに大野晋氏による日本語タミル語由来説の考えを加える事によって、拙論に下記に示す様な新たな視点を加える事が出来たと思っている。

その言語構造の根源を、インド原住ドラヴィダ族に含まれるタミル人から直接入手した日本民族は、恵まれた風土の中で言霊の完成度を独特な形で高めて行ったのだが、それから数百年後に再びドラヴィダが持っていた「再生」思想から発想を得たアーリア族バラモンが哲学書「ウパニシャッド」の中に構築し

「輪廻転生」思想も、釈尊が構築した仏教の枠組みに乗った形で中国、朝鮮半島を經由して受け入れる事が出来た。

これらの信仰、や共同幻想が純粋な形で蓄積されてきた日本本民族だからこそ、欧米に征服され苦しんでいたアジア民族の解放に向かって捨身供養として爆発したのであり、それが「大東亜戦争」という事になったのだと思うのである。

ここにおいて、正しく「アジアは一つ」の私なりの理解を得た心地がしてある種の満足感を覚えている。それは、戦時中の様な上から目線のものではなく、アジア全体に対する報恩謝徳の念に繋がるとも言えるものだが。

**(4)** 更に晩秋に至り、中村元監修・補註『ジャータカ全集』全10巻に目を通し、ここには南伝小乗仏教に伝わる547話のジャータカ(釈尊の前世物語)が収められて居るのだが、その最終547話「布施太子前世物語」の訳註から、大正10年発表の倉田百三著 戯曲『布施太子の入山』の存在を知り、またこの説話は、昭和初期、宮沢賢治にまで強い影響を及ぼしている事が分かった。

この説話は『国を追われるまでも布施を行い続け、ついには最愛の妻と二児さえも布施するに至るヴェッサンタラ太子の物語』である。

この説話に強いインパクトを受けた賢治は、彼の死の前年、数少ない生前発表の童話「グスコブドリの伝記」を発表したのである。

これは、東北農民の救済の為に死を期して火山を爆発させたブドリの話で、賢治はここで大義(ここでは東北農民の救済)の為に捨身を、日本文学として初めて描いたと言えるのではないかと思う。

賢治の後、安岡正篤が北一輝の生涯を大義(ここでは日本体制の革命的変革)の為に捨身と捉え、その流れの中に私の「仏説大東亜戦争」(ここでの大義は東亜の解放)があると認識する事が出来、またまた満足感に満たされているところである。

以上は要約した記述だが、詳細は私(敏翁)のホームページに掲載されている。

URLは <http://toshiou1048.sakura.ne.jp/> (“敏翁”でも検索可能)

上記(1)節は『仏説大東亜戦争』、(2)節は『華嚴経と捨身』、(3)節は『仏説大東亜戦争の原点を探る』、(4)は『ジャータカ、倉田百三と宮沢賢治』というタイトルにて掲載されている。

## **2. 清澄白河珈琲散歩**

小生にとって旧年中のトピックスは上記に尽きる様にも思えるのですが、余りに固すぎると思われる話題なので、柔らかい話題を一つ紹介したいと思います。

ここ2年ばかり「酒場放浪」&「カラオケ」について紹介してきました。

昨年も3回ほど行いましたが、ややマンネリ気味なので、今回は省略します。

代わりに、これも今まで触れてきた「珈琲」に関しては新しい試みがあったので、それを紹介します。それは最近珈琲第3の波で有名になってきた江東区の清澄白河界隈を複数の珈琲店訪問を主目的として「東芝材遊会」有志5名で行った散歩です。

次頁の図は第3の波の代表格である「ブルーボトルコーヒー」の前に立つ5名です。(左端が小生)散歩全体の簡単な紹介は、赤枠をクリックすればご覧頂けます。



上文1. に見える様に我ながら、議論の行く末は益々常軌を逸しつつあるようにも思えますが、米寿老人の戯言とお笑い下さい。